

教会会報

いずみ

復刊第28号

『教会全体研修会』特集号

知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集：愛宕町教会・総務部 発行者：矢野俊介 発行所：甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyokai/>

みことば

世の光キリスト

聖書 ヨハネによる福音書 第8章12〜13節

牧師 矢野俊介

イエスは再び言われた。
「わたしは世の光である。
わたしに従う者は
暗闇の中を歩かず、
命の光を持つ。」

(ヨハネ8・12)

よく知られている聖書の言葉です。「わたしは世の光である」とイエス様はおっしゃいました。有名な言葉ですが、それならば、こうおっしゃることで、イエス様は何を伝えようとなさったのでしょうか？

ここでイエス様は「世の光である」と言い切っておられます。従ってこれは、「わたしは世を明るくしたいと思う」という願望表現とは違います。イエス様はご自身のことを「まことの光」と言い表しておられるのです。しかし、ご自身が「まことの光である」というのは、どういうことなのでしょう。いろいろ思い浮かべることが出来るかもしれませんが。イエス様は信じる者たちの心の中を照らして、気持ちを明るくしてくださるのだと思う方がおられるかも知れません。別の方は、イエス様が世の光として、社会全体を照らし、世の中の隠れた罪や悪を明るみに下しに引き出されるのだと考えるかも知れません。イ

エス様が世の光であるということとは、聞く人の解釈によって何十通りにも受け取ることができそうです。

一体、イエス様ご自身は、この言葉を何故お語りになったのでしょうか？ よくよく考えてみると、ご自身のことをいきなり「世の光である」と言い表すのは、どうにも唐突な感じがするのです。どうしてイエス様は、突然にこんなことをおっしゃったのでしょうか。そのことを理解するために、この言葉が語られた時と場所を考えてみたいのです。

イエス様がこの言葉をおっしゃったのは、エルサレム神殿で毎年盛大に開かれていた仮庵の祭りが終了した翌日です。7章37節にこう述べられています。

祭りが最も盛大に祝われる終りの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。――

イエス様は祭りの最終日、神殿の境内で大声で呼ばわっておられます。そして、その日は終わります。7章53節〜8章2節にかけて、こう言われます。

人々はおのおの家へ帰って行った。イエスはオリブ山へ行かれた。朝早く、再び神殿の

境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。

仮庵の祭りが終了し、人々が家に帰ると、イエス様も弟子たちと一緒にねぐらにしていたオリブ山に退き、一晚を過ごされます。

翌朝、まだ早い時間に神殿の境内にお入りになると、祭りはもう終わっていたのですが、イエス様の姿を見つけて、ぜひ話を聞きたいと願う熱心な人々がイエス様の御許に集まって来たので、座って教え始められるのです。従って、この日は仮庵の祭りが終了した翌日ということになります。

場所は神殿の境内ですが、8章20節にはもうすこし詳しく場所が特定されています。

イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。

当時、宝物殿の前庭には賽銭箱があり、おそらくその横に座って話されたのですが、この時と場所が主イエスの言葉を理解する上で大きな手掛かりとなります。

なぜなら、この場所は毎年の仮庵の祭りにおいてある催しが行われる場所だったからです。毎年、仮庵の祭りの初日に、ここでは大きな火が焚かれました。言い伝えでは、黄金の燭台が築かれ、祭司が梯子で登って行って火を灯すと、大祭司やエルサレムの主だった人々がそのたもとで踊り、讃美し、その光は高く神殿の城壁を越え

てエルサレムの町中まで届いたと言われています。このかがり火が何を表わすのかと言うと、イスラエルの始まりとなった出エジプトでの出来事を思い起こす行事なのです。

あの出エジプトの時、主なる神が雲の柱、火の柱の内にいて、イスラエルに伴い、導いてくださいました。神様は夜通しイスラエルの民を守り、導かれました。それで民の側も光の柱の下で讃美し踊り回って感謝を表していたのです。そういう場所立ってイエス様は、ご自身の御言に耳を傾けようとする人々におっしゃいます。

わたしは世の光である。

往時、神様が火の柱の内にいてあなたがたの先祖を導いたように、実は、あなたがたを導くまことの光はわたしなのだと、イエス様はおっしゃるのです。

出エジプトの時、雲の柱、火の柱は、見通しのきかない荒野の中で進むべき道を示し、また、追いかけてくるエジプトの騎兵との間に立つてイスラエルの民を守ってくださいました。

世の光であるイエス様がこの私を導かれると信じ、その御言に聴き続ける時には、私たちはどんなに見通しが利かない場所に置かれても、苦しみや悲しみに出遭っても、必ずや人生の本来に目指すべき目的地に辿り着くことができます。

そのような方が、今日、私たちにも呼びかけていてくださることを憶えたいのです。

2015 年 教会全体研修会

2015年9月20日(日) 礼拝後～

《講師》 宍戸 俊介 牧師



愛宕町教会の 伝道

講演要旨

伝道を教勢で考えない

ここ20年ほどの教勢の推移を検討すると、礼拝出席者数はおおむね79名～83名で推移しており、2010年代に入ってから70人代になっていることが分かります。この数字は、礼拝出席者数が、礼拝堂の収容定員いっぱいには達していることを表していると言えます。

礼拝堂に置いてあるイスの収容定員を数えてみますと、およそ90名分です。礼拝堂の内部のイスが飽和状態になると、礼拝堂の最後部の座席にも座る方が出てきますので、それで幾分か座席を増やすことができますが限りがあります。

日頃、礼拝する営みが当たり前になっている方々は、礼拝堂の中が混み合っていることをあまり考えずに、礼拝をささげていることも多いかと存じます。ですが、礼拝に初めて参加する人の場合、この距離の問題というのは、かなり大きなウェイトを占める事柄になる場合があり得るのではないのでしょうか。

初めて教会にきた人たちにとっては、礼拝堂が混み合っていると、気軽に礼拝に参加しにくくなってしまう。多人数で礼拝をささげられるようになるためには、座席をゆとりさせる工夫をする必要があります。礼拝堂内のスペースが急に広がる訳はありませんので、工夫するのは良いことですが、礼拝者の人数増加によって伝道の進展を見ようとすると、なかなか進展しない頭打ちのように思えてしまつて、明らかに過剰なことが難しくなるでしょう。それは得策ではありません。伝道しようと思えば思うほど、自分たちは何もできていないような無力感を感じることは避けなくてはなりません。

伝道の志

教勢で考えないのなら、伝道のモデルはどこから得られるのでしょうか？ それは聖書の中に伝道のお手本を見るのが良いでしょう。初代教会の伝道のいちばん基本にあった姿勢はどういうものだったのでしょうか。

使徒言行録23章11節を手がかりに考えようと思

います。

その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証しをしなければならぬ。」

神様が使徒パウロを励ましておられます。ここでは使徒パウロにイエス様が現われておられるのですが、愛宕町教会に対しても、主が同じ御言を掛けてくださるのではないのでしょうか。

主イエス・キリストの御言に慰められ、励まされ、勇気づけられて伝道は進展して行きます。このようにイエス様がパウロ（私たちの場合は教会）に現われてくださったのは、いったいどうしてでしょうか？ イエス様がこのように励ましてパウロに力を与えてくださるのは、この夜、パウロが落ち込んで力を失っていたからです。

パウロは何に落ち込んでいたのでしょうか？ 使徒パウロは異邦人に向けて遣わされた使徒であると言われます。しかしパウロ個人は、同胞であるユダヤ人に対して何としてもキリストの福音を伝えたいという望みを強く持っていました。同胞の救いのためなら、パウロ自身、天上の命の書から名前を消されても構わないと言っただけに、パウロは同胞の救いを願っていました。

そんなパウロにチャンスが訪れます。最高法院の議員たちがパウロの弁明を聞く機会が訪れました。彼はこの機会に何とかして同胞が救いにあずかって欲しいと願って説教します。ところがパウロの説教の身を吟味する以前に、最高法院の中で復活を巡ってファリサイ派とサドカイ派が分裂し、パウロの説教は深く受け止めてもらえないままに終わります。パウロは、説教が全然届かなかったことに深く落ち込んでいたのです。

イエス様の福音を私たちが鮮やかに伝えることができて、愛する家族や友人たちが皆が、日曜日に笑顔で教会に集えたらどんなに素敵かと思うのですが、実際にイエス様の福音を伝えようとする、私たちはしばしば、思うように行かないという歯がゆさを経験することになります。

パウロが経験したのも、それと同じことでした。伝えたい人に福音が伝わらないもどかしさで

アンケート集計結果

回答数 40 うち、男：14、女：24、不明：2
 年 代 30 代以下：1、40 代：4、50 代：5、60 代：12、70 代以上：18
 評 価 よかった：37、どちらともいえない：3、いいえ：0
 どちらともいえないの意見 もう少し役員会で相談してテーマを絞る。
 会の持ち方を検討する。

《主な意見》

- ◎教会の問題点について話しあう研修会が必要（年に 1 回でなく）。
- ◎一番身近な家族のために祈っていききたい。
- ◎青年に向けての伝道、お母さん世代への伝道方法はないかと思う。
- ◎一人住まいの会員のアパート建設を願っている。
- ◎穴戸先生のお考えを聞くことができて良かった。
- ◎聖書からテーマを探ろうとしたことは新鮮だった。
- ◎伝道の目的は自分自身でなくイエスの証しに徹すること。そうできるように祈りたい。
- ◎100 人という数字の目標より大事なことがある気がします。CS の人数が増えることや、一人ひとりが信仰の歩みを続けていくなどです。
- ◎会堂の机・椅子にまだ容量はあると思います。
- ◎久しぶりに参加した研修会で、キリスト教信仰の基本を学ぶ機会でした。
- ◎CS の働きが最も大切だと思っています。

- ◎まず家族を信仰に導くこと。教会につながる青年が増えるよう祈っている。
- ◎普段、牧師先生と個人的にお話しすることは少ないので、教会や伝道のビジョンについての話を聞くことができて良かった。
- ◎早朝の祈り時間を定めて、毎日、時間のあるかぎり集まって伝道の為に祈ったらよい。
- ◎勉強会と今回のような形が一年おきにあると良い。
- ◎今回は身近な問題で語ってくださり良かった。
- ◎現代の若者が異端や他宗教に行ってしまうのは何故か、そのような人々を教会に迎え入れたらよい。
- ◎言葉遣いの大切さは本当にそうだと思う。
- ◎昨年までのような聖書の学びの研修会がよいと思う。
- ◎夜の祈祷会を 7 時半からにしてくれたら出席しやすい。
- ◎食事に続いての開会で出席者が多かった。弁当だったので、準備と片付けがしやすかった。
- ◎今回、牧師先生のお考えを聞いて安心した。あせりは禁物、人に期待せず主に期待する。

使徒言行録 6 章 1 節～6 節を手がかりに考えてみようと思います。

そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それ、兄弟たち、あなたがたの中から、『霊』と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」

一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンテオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、使徒たちの前に

伝道する教会の原型

伝道の志を確かにされた上で、では、その伝道する教会はどのようなものがあるのが良いのでしょうか？ お手本になるのは、聖書の中で教会がどのようにに労苦しながらできあがっていったかという姿です。

私たちは、その主の働きに仕えることが求められているのです。

そんなパウロに、この夜、イエス様が現われてお語りくださったことは、伝道の主体はパウロではなくイエス様が自身なのだということです。イエス様がパウロを遣わして、エルサレムの最高法院で説教をさせ、福音を力強く証しさせられました。同じように「パウロよ、お前はローマでもわたしを証しするのだ」と、イエス様がおっしゃってくださいます。私たちに求められるのは、忠実に証しすることです。働きの結果はイエス様が責任を持ってくださるのです。

私たちがイエス様を証しする時には、必ずそこにイエス様が自身がいってくださいます。イエス様は、最も良い時に、その人が本当に心の底からイエス様による救いを信じて受け入れることができるようになるまで導いて行かれるのです。

立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。

初代教会の人々は、その教会の中に「祈りと御言葉の奉仕」と、「食事の世話」など、より広い意味での教会員の生活全般に関わる奉仕という二つの務めがあることを認め、それぞれに重要であると考えました。そして、そのために役割分担をしたことがこの記事に述べられています。

その際、どのような方針で役割分担されたかを観察すると、5 つぐらいのことを見て取れると思います。

- ①まずは、ギリシア語を話すユダヤ人の教会とヘブライ語を話すユダヤ人の教会といった具合に教会を細分化することを避け、あくまでも全体で一つであらうとしました。
- ②教会は、一個人とか少数者で担いきれるものではなく、役目を分担しながら、教会の秩序に従って立てられた人々によって担われていなくてはならないとされています。
- ③その際、奉仕の中では、祈りと御言葉の奉仕が優先して大切にされました。これらの奉仕は教会が教会であるために不可欠だからです。これを欠いて教会が立つことはできないと、使徒たちは考えました。
- ④しかし、だからと言って御言葉以外の奉仕に仕える働き人も、御言葉への奉仕者と同様に重んじられなくてはならないとされています。
- ⑤そのような務めに当たる人々は、この世的な評判もさることながら、知恵に満ち、何よりも霊的な人でなくてはならない。

使徒に加えて、より広い教会生活の奉仕に奉仕者が選出された時、そこでは「霊」と知恵に満ちた評判の良い人という基準で選挙が行われました。

教会の奉仕の業は、たとえ「祈りと御言葉の奉仕」でなくとも、主イエス・キリストがそれを果たされるのだという畏れと慎みを持って行われていきます。イエス様が一人ひとりを教会に迎えてくださり、礼拝をささげて共に生きるよう導こうとしておられるという霊的センスが求められるのです。

今後の伝道について

中嶋 長続

急速な高齢化が進んでいる日本は、国家の問題だけでなく、教会の伝道方法についても検討して、その方法を改善するという積極性が問われている時であると思う。愛宕町教会の今後の伝道の在り方について私見を述べると、

1. 信仰経験の浅い新会員の信仰向上訓練として、(イ)証しをさせること。現在殆どする機会がない。(ロ)祈ることは神との対話であるゆえ、教会、家庭すべての場合において、祈りから始め祈りで終わる信仰態度が重要であるが、現状は単に礼拝に出て帰ってしまうている。これでは会員の信仰は何年経っても乳児と同じく向上しない。(ハ)万一にも、会員になることにより葬儀や結婚式が安価にしてもらえ、等の考えを持つ者があつたら、神を侮り軽視していると言え

る。かくの如く信仰していると、万一の不幸、艱難に耐えられず信仰を放棄する危険がある。

2. 信仰の原点は、(1)十字架の贖いを真に信ずる上に立って証しすること、(2)常に祈ること、(3)聖書を毎日学ぶこと、である。

3. 教会としては高齢者、病欠者、長欠者、新来会者を如何なる方法で捕らえ入信と教会出席に導くか、である。

4. CSの強化、建物の改築より信者の信仰向上、1000名礼拝の達成が重要である。

喜び、祈り、感謝

山本 幸子

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。

(テサロニケの信徒への手紙一 5章16、18節)

これは鈴木顕栄牧師から私たちの結婚の時にいただいた聖句です。今は台所兼食堂兼居間になつている部屋の壁に額に入れて掛けてあります。誰にでも見える所にあるのに家族の誰も意識して読んでいないような気がします。

「あなたは？」と聞かれたら、実のところ、あまりにも私に出来ないことを強いられているように素直に聞けないでいました。聖句の冒頭の「常に」とか「絶えず」とか「すべて」という言葉にひつかかってしまうのです。結局、自分の考えを肯定して御言葉を受け入れることが出来ず、喜びからかけ離れた生活をしていることになりました。

最近、穴戸俊介牧師がフィリピの信徒への手紙の中で「パウロの喜び」を何回も取り上げて説教してくださいました。私は牢屋の中に捕えられているパウロが何故いつも喜んでいられるのか不思議でなりませんでした。自分が喜びで満たされていた

なければ信徒にこんなメッセージはおくれません。鎖につながれた苦しみの中でもパウロは、神様が自分を愛し、憐み、慰め、恵み、絶えず見守り導いていて下さることを心底確信していて、その喜びを信徒と共に味わい感謝したいと願っているのだと、説教を聞きながら深く感じ取ることが出来ました。「常に」「絶えず」「すべて」は、神様が私たちに下さっているのが先で、だから「常に喜び、絶えず祈り、すべての事を感謝し」て、自分の気持ちを神様に伝えるのだと。

そんなことはクリスチャンとして当たり前だろう。毎週教会に行つて何を聞いてきたのか。そうです、言葉としては何度聞いたか分かりません。自分の頭で理解しようとしている限り分からなかったのです。聖霊の働きかけを素直に受け入れることが出来た時、初めて別世界を見る思いをしました。喜びと感謝で涙がこぼれ、神様との会話の祈りが出来ました。

教会が信徒たちの喜びで満たされて初めて、伝道もできるのではないのでしょうか。こんな私ですが、神様に赦され信徒の交わりの中に入れて頂けていることを心から感謝しています。

研修会を終えて

渡辺 春美

今年の研修会は参加人数が大

変多く、感謝でした。

食事をお弁当に変え、片付けなしにして、直ぐに研修会に入つた事が効を奏したことと思います。

私はこの研修会の後、数年前に、「幻を語る」と題して何人が発題し、そのうちの一人として、私なりの幻を語つた事を思い出しました。その時、何を語つたか定かではありませんが、今、広い駐車場が与えられ、教育館がきれいになって、結婚式も、葬儀も心置きなくできる、そんな環境を整えられたことに感謝しています。

今年8月に分区分教育部では、サマーフェスティバルを愛宕町教会で行いました。食堂、駐車場、教育館と広く使わせていただき、分区内の大人と子供合わせて105名が集い、交わりを深める事ができました。

私たちは、これからも神様から与えられたこの環境を、与えられた賜物をもって、主の御栄えを表すべく、十分に用いていただけたらと思うのです。

今回の研修会で穴戸先生は、「教勢を数字で測るのは別の伝道のモデルが必要」とおっしゃいました。私には別のモデルとは何なのか捉えきれずにいます。ただ、穴戸先生が例を出して下さった「伝道する教会の原型」から教会規模が拡大していく教会員の心がけが学び取れるように思います。まずは「祈りと御言葉の奉仕」が優先される。私たち一人ひとりが「祈りと御言葉」を大切にして生活し

ていく事が、教会の群れが拡大しつつある現在、新しく教会に招かれた方々にも伝わっていくのではないのでしょうか。

また、家族伝道に関しても、第一に祈りであり、御言葉から御心を知りつつ私たち自身が歩んでいく事によって伝わっていくと思うのです。主が働いて下さると信じつつ、祈りつつ歩んでいきたいと思います。

これからの伝道

弓田 寛志

今年度の教会研修会の主題「愛宕町教会の伝道」にちなんで、伝道についての原稿依頼をいただいた。愛宕町教会もここ20年で多い年は平均86名礼拝出席者があつたとか。あの頃は、現在亡くなられた方もご健在だつたし、母子室も子育て世代が大勢いたなと思ひ出される。その頃から比べると、まだまだ県内の他教会の中では多いかもしれないが、年平均の礼拝出席者数は減ってきている。以前から取り組んでいることだが、ここで改めて伝道について考えるには、今回の研修会が良い機会だつたと思う。

教会に、若い人・青年が少なくなってきた、高齢化が進んでいるという声を当教会だけでなく、他教会でもよく耳にする。まあ、日本の人口構造がそのようになつてきているのだから仕方のないことかもしれないが。

まず、一番手っ取り早いのは、家族伝道、信仰の継承だと思ふ。子供たちが引き継いで、礼拝に出席してくれば良いのにと思ふ。ただ、今の子どもたちは部活で日曜日忙しく、進学となると県外に行ってしまう(県外に行っても、そこで礼拝生活していれば良いけれど)、また就職、結婚などで教会から足が遠のいてしまったり、さまざまな壁がある。その壁をどう打ち破るか。若い人がいないと、新たな若い人も来づらかったりするのではない。教会学校にも、若い教師がいると良いなと思ふ。

現在、教会をお借りして幼稚園、保育園の園長先生の会議等で使用させていただいている。また、バスケットコートを使つてバスケットをしている若者を見かけたりもする。山梨ダルクでもミーティングで使用している。このようなことで、教会と遠い存在の方々が教会を身近に思つてくれたらと思ふ。若い人がダメなら、仕事をリタイヤされたご近所のシルバーの方の集まる場所、公民館のようなコミュニティセンターの場にするとか、「子供110番」の指定場所にしてもらうとか、地域の一つの場となればと思ふ。

また新来会者が来られたら、「教会はとても楽しく、気持ちが良いですよ」ということを、いかにアピールできるかではないでしょうか。

受洗にあたって

信仰告白

信仰告白



目黒 雅美

私は1957年9月13日、北海道厚岸町で生を受けました。生まれて3ヶ月で産みの親に捨てられた私は、複雑な家庭環境の中、4人兄弟の中で育ちました。

経緯を話しますと長くなりますが、私は平成21年2月に刑務所を出所し、3月にダルクに助けを求めました。ダルクに来る前に、北海道警察本部に暴力団からの脱会届けを出し、私自身のため、薬から縁を切るため、また、子供たちのため、北海道を離れる決心をしたのです。

私は、「神などいない」と常にしてきた人間です。しかし、平成21年7月、ここ愛宕町教会に導かれました。と言うのは、ダルクに来て愛宕町教会の方

ちといろいろな形で交わりを持つて、その中で、本当に人間の優しさ、温もり、そういうものを、生まれて初めて感じたからです。

平成23年、調理の免許を学び、その年のクリスマスに洗礼を受ける予定でしたが、しかし、私には30年ほど前に仕事上の事故のため脳炎症という後遺症が残り、発作が起き倒れることも多く、頸椎損傷という大怪我をして、静岡の施設に移ることになり、教会に通うことが出来なくなっていました。

今、私はまた山梨に戻つてきて、愛宕町教会に帰ることが出来たのも、やはり兄弟姉妹の助けのお陰、そして、あなたが(神が)私を温かく見守つてくれていることを信じて止みません。

私が怪我をした時、医師からは一生車椅子だと言われました。でも、私は今、このように杖をついて、足に器械を着けて歩けるようになりました。医師は奇跡だと言っていました。でも、この奇跡は、私が起こした奇跡ではありません。神様が私に奇跡を生まれさせるための勇気を与えてくれたのだと信じて

止みません。

それから、心臓の手術、6月には心筋梗塞で入院、7月には肩の骨の陥没、いろいろな怪我、でもそれを神様が見ていてくださって、常に私を守っていてくれるということ、私は今、改めて感じて止みません。

私が今日この場所で洗礼を受ける決意をしたのは、初めて信じられるものを見出したからです。本当の神様に出会ったからです。一生車椅子の生活と医師に言われたにもかかわらず、杖をつきながらもこうして歩けるのは、自分の力ではなく、まさに神様の恵みと力だと信じて止みません。これからも、ただ神様を信じ、神様から勇気をいただき、祈りの信仰生活を続けていく所存であります。

今日はたくさんの兄弟姉妹の見守る中、また、神様が私を見守っていてくれる中で、この日を迎えられることに、天なる父、主イエス・キリストの御名のもとに感謝を込めて祈りを捧げます。アーメン。

(2014年9月7日)

主日礼拝にて受洗)



信仰告白



野澤 俊江

私がキリスト教に出会ったのは、中学から英和学院に学んだことによつてです。英和学院の教訓は、「敬神・愛人・自修」でした。私は、その言葉が大好きでした。

中学3年の頃、洗礼を受けたと思います。私の周りにはたくさんのクリスチャンがいました。しかし、その人たちを見て、クリスチャンとはこんな人になるのかと思ひ、思い止まりました。それからというもの、クラブが忙しく、日曜は眠りたいという気持ちが強くなり、人と教会を忘れていました。

結婚し、子供を3人授かり、やはり教訓が忘れられなく、子供たちも英和学院に通わせました。私は日曜日も仕事だったので、教会に行くことなく過ぎました。

もう25年ほど前になるでしょうか。結婚生活の途中、精神的に耐えられず、病となり苦しみました。苦しんで苦しんで、今も病に苦しんでいます。耐え

て耐えて離婚に辿り着きました。そして、良き友を得、この愛宕町教会に導かれたのです。

でもその時の私は、教会というものに疑問を持ち、いろいろな悩みを持ち、疑い深い心になっていました。私はなぜ、こんな人生を歩まなければならいいのか。なぜ私は、こんなに苦しまなければならないのだろう。毎日毎日思い悩みました。存在がなくなったら、どんなに楽になるだろう。でも、まだ母が生きているのに、彼女を最高に悲しませることは出来ませんでした。

しかし、北紀吉牧師に出会い、私のその大きな鉛の塊が一欠片ずつ剥がれていくのが分かりました。北牧師はどうして私の悩み、迷いを知っているのだらうと不思議にさえ思うほど、礼拝における説教の中で鉛のブロックは取り去られていきました。

私にとって宝物の子供3人が各家庭を持ち、可愛い孫がいて、何十年も回り道をしましたが、私がこの時を得るための神様の出来事だったのだと受け止めることができました。日々生かされている命に感謝し、祈っています。主イエス・キリストをこの世の救い主と信じ、歩みます。

愛宕町教会の方々にも温かく迎えられ、良き仲間ができました。北牧師に出会っていなかったら、未だ鉛を抱えていただろうと思います。北牧師に出会ったことは、私の人生において最良の事件です。多くの皆様に感謝しなくてはなりません。

私の好きな聖書の言葉です。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずですよ。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」(コリントの信徒への手紙一10章13節)

(2014年12月21日)
クリスマス礼拝にて受洗)

クリスマス礼拝にて受洗)

信仰告白



伊田 美恵

わたしは、お母さんのお腹の中にいる時から教会に来ています。そして、わたしのひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん、代から教会にきているので、わたしとわたしの姉妹は4代目のクリスチャンとなります。

わたしが洗礼を受けようと思ったきっかけは3つあります。一つ目は、めぐ姉ちゃんが北先生に洗礼を受けたいと話していた時、わたしはお母さんと一緒にいて、その時の真剣なめぐ姉ちゃんの表情が「かつこい」と思ってから、わたしはずっと洗礼を受けたいと思っていました。

二つ目は、聖餐式の時のパンとぶどうジュースです。小さい時から食べたいと思っていたからです。

三つ目は、今年のイースターに洗礼を受けた望(荻野)くんが、「次に洗礼を受けるのはお前だな」と言っていました。その言葉を聞いた時、わたしは洗礼を受けることを決意しました。

洗礼を受けた後は、毎月念願のぶどうジュースとパンを食べ、毎晩聖書を一章ずつ読んでいきたいです。

北先生をはじめ、教会の皆様、まだまだ分からないことがたくさんあるので、これからもよろしく願います。また、今までわたしのことを祈ってくれていたじいじやばあちゃん、たくさんの方々の教会の方々、これからも、わたしが神様の子どもとして歩み続けられるように祈りをよろしく願います。

(2014年12月21日)
クリスマス礼拝にて受洗)

祈りの生活



望月 孝子

家庭としてのあるべき形、心がまえとは、というひとつの疑問が、もの心ついた3、4才から成人になった今も私が問い続けるテーマです。

祖父母、両親、兄弟姉妹、親戚の従兄弟たち。いつも家の中に親戚の誰かが来ていたり、とても来客の多い家。そんな雰囲気の中に生まれ育った私。ですが5才の春、父が一年余の心臓の病気で亡くなったので、子供のいない母の実家へ私が預けられました。そこは勿論一番近い親戚で、いつも遊びに行っていた家でした。

驚いたのは朝の暗いうちから大人たちが走りまわって養蚕をしている家庭でした。四六時中、5才の私がすることを「ダメ」「いけない」とそれぞれの

転入会しました。

大人に注意されるのが、私にとっては何れられる言葉と受け止めて辛い悲しい毎日でした。小学校6年のとき養子縁組によってそこに結ばれ、堅苦しい家庭に耐えました。金儲けができない人間なんて、という価値観の養父母の態度から、家庭としての本当のあり方に疑問を持つていました。

そして求めたのが教会でした。養父母の願いと自分の進み方の願望のずれも、第三者の助言もあって、結局は受洗してクリスチャンとして道を歩むことになりましたが、養父母への孝養を一番大きい目標にして一人子として精一杯尽くしました。不思議な縁で故小笠原愛先生との付き合いも大きかったと思います。

酒、酒、と酒の力で労働に耐える古くからの農家のしきたりも70才近くまで続いたでしょう。酒には全然縁のない甘党の夫に恵まれ、夫もまたキリスト教という大事な目標を遅ればせながらしっかりと受け止めて旅立ちました。

やっと聖書を通し御言葉に聴く生活、家庭がと、気が付いたら一人暮らしになって90才を超

えてしまいました。信仰篤い周囲に導かれつつ、祈りの生活ができる今日です。

離れて家庭を持つ子供も同じ道を選びました。三代同居の生活も長年続きましたが、苦しみ迷ったとき、祈ることによって道が拓けて歩んだ90年でした。

人間として先ず祈り、主に導かれ、御言葉に聴く日常が今日までの歩みでした。感謝に生きることをダメという周囲のない現在です。

(2014年11月9日、転入)

自己紹介



鈴木 信行

1954年7月30日に牧師家庭の長男として生まれた私は、多感な思春期を須藤繁兄、清藤城宏兄、末今朝夫兄、岩間かつみ姉等々の愛宕町教会の優れた先生方の温かな指導をいただき、多くの仲間とともに充実した教会学校、高校生会の中で育てられました。中学3年のクリスマスに2名の友人とともに父・鈴木顕栄牧師から洗礼を受

けました。

2年間の大学浪人後の大学入學に伴い永福町教会(東京都杉並区)に転会したのは1974年のことでした。浪人1年目は東京都国立市に住んで、国立教会の礼拝・祈祷会に出席。当時、小学校4年生の穴戸俊介少年といっしょに遊んだのはその夏休みでした。

大学卒業後に相模原市役所に行政職として就職。6年間に在籍した永福町教会時代に出会った現在の妻明子と1980年に結婚して八王子市に住み、近くの日野台教会(東京都日野市)に転会しました。八王子市在住の5年間に2人の娘が誕生しました。その後町田市に転居しました。

1994年4月に聖愛幼稚園に転職したのですが、家族を町田に残したまま愛宕町の実家に居を移し、週末には自宅に帰るという終わりのなき単身赴任の生活に入りました。現在、22年目になります。

愛宕町教会への転入会は、これまで何回か前任の北紀吉牧師からお勧めをいただいていた。しかし、妻の仕事と今年99歳になった妻の母親等の家庭事情で当分は二重生活が続くことが予想され、愛宕町教会への転会は無理があると考えてお断りしてきたのです。その事情は現在も全く変わっていません。「愛宕町教会創業家である鈴木

木家の在り方を考えるべき」との北牧師転任に際しての深いご配慮によるお勧めに従って、この度、転入会を決心した次第です。

礼拝出席など教会員の義務が果たせず、ご迷惑をお掛けしますが妻共々よろしくお願いいたします。

(2014年12月27日、転入)

自己紹介



鈴木 明子

私は1946年9月4日残暑厳しい日、疎開先の秋田県大曲市(現大仙市)で産声をあげた。生まれるまで男児と決め付けられていたようで、女兒だったと知った周囲の落胆は大変だったそう。

私には2歳上の姉がいて、子どもの頃は、おとなしく聡明な姉、やんちゃで自由気ままな私、親をはじめ周囲は、私が男の子だったらどんなに良かったかと思っていたようだ。

自由気まま、好きなように生きたいという想いは思春期に

なっても変わらず、中学1年生の時に親友の弾くピアノを目の当たりにし、自分も絶対に弾くと決め、旧友のレッスンに同行し先生に直談判、「ご両親に相談してね」という先生の言葉にハッとして返ったのを今でも覚えていて。それを受けた母は「ピアノも無いのに習えるの？」など否定的な言葉しか出さなかったが、父は許可を出したのである。

当時、我が家は決して豊かな家庭ではなく、むしろ貧しい方であつたと思う。ましてや「ピアノを弾く」などはお金持ちのすること、一般庶民からは高嶺の花の時代に私はピアノを習うことを許されたのである。このことがその後の私の人生の決定的なこととなったことを思うと、父に心から感謝すると同時に、許可を出した父を尊敬せずにはいられない。

習い始めて1年後、父はどこかの古道具屋で49鍵の足踏みオルガンを見つけてきて、それが私の練習用になった。現代のように情報が豊かに交差することが無かっただけに、私はピアノリストを目指しひたすら練習に励んだ。1年後に憧れのピアノが入り、暇さえあれば弾いていた。防音もされていない家屋からは、さぞや音が漏れていたと思うが、近所からの苦情などは皆無であつた。地域連携もまだ健在でのどかな時代であつたの

だろう。

私はピアノを始めるには遅すぎた年齢になって始めたことで、弾くことへの違和感、嫌悪感などの経験は一度もない。私にとって、ピアノが生涯の最高のパートナーと考えることは本当に幸せであり感謝である。ピアノを土台にクラシック音楽を知り、そこからリトミック、フラメンコと私の世界は広がった。

母校、国立音大附属高校で35年間リトミック教師として勤め、退職後、保育園を経て、現在東京YMCA社会体育・保育専門学校で学科長として勤務している。学科長の責務や今までやったことのなかった事務仕事に音を上げながらも、学生たちとピアノを弾いたり、讃美歌を歌ったりすることは本当に幸せなことである。

好きなこと、やりたいことを十分に堪能している人生を神に心から感謝するのである。

受洗・教会生活については、1975年クリスマスに永福町教会で三永恭平牧師から受洗し、オルガニストとして奉仕。1980年に鈴木信行と結婚し、八王子市に住み、徒歩圏の日野台教会に転会(35年間に在籍)。80年・95年にはオルガニスト、聖歌隊指揮者として奉仕した。

(2014年12月27日、転入)

2015年度夏期伝道実習報告

愛宕町教会での夏期伝道実習

東京神学大学大学院 1年 見城 康佑



2015年度の7月から1カ月間の夏期伝道実習を愛宕町教会で過ごさせていただきました。宍戸先生のご指導、教会員の皆様のお支えがあって、充実した学びの時となりましたことに感謝いたします。

夏期伝道実習が始まる前、東京神学大学の先生から「実習と名はついていますがこれも一つの伝道です」と言われたことが心に残っています。しかし、私にとって今回の夏期伝道実習はむしろ「伝道に行き、自分が多くを学ばされ、伝道されて帰った」というような経験でありました。教会での交わりを通し、また教会員の皆様と共に御言葉について語り合うという経験を通し、御言葉を真剣に求める皆様の姿勢を見て、私自身の襟が正されるような思いでした。御言葉によって教会が養われ、立てられていくということを知りました。このような教会に遣わされたことを嬉しく思います。

夏期伝道実習の1カ月で、私は自分自身で「これくらいは出来るだろう」と思っていたことがことごとく打ち碎かれるという経験をしました。それは何よりも御言葉に向き合うということのなかで起こりました。「牧師の忙しさを体験していただく」と宍戸先生がおっしゃっていたことがよく記憶に残っていますが、多くて週に4回聖書のお話をする機会があり、他にもスケジュールがあって限られた時間の中で準備していくということは全く初めての経験でありました。

特に私にとっては、説教や聖書研究の機会が与えられた時、いつも準備に時間が掛かってしまうということが一つの気がかりとなっていて、このことは今回の夏期伝道実習での大きな課題でありました。実際にやってみると、なかなか思うようには準備が進められず、焦るほど行き詰ってしまうということがありました。苦しい思いはしましたが、このような経験は自分にとって必要なことであつたと思います。

また、自分がまだまだ聖書をしっかりと読めていなかったことも思い知らされました。説教についての宍戸先生のご指導を受けて、自分では全く気付いていなかった欠点が示されました。宍戸先生は「本当に聖書が語ろうとしていることは何か」ということを繰り返し問題にされました。私は必死に注解書を読んで勉強していましたが、それだけではなく自分でよく聖書を

読んで、聖書全体からメッセージを聞いていくことが大事だと学ばされました。

また、自分が福音だと思って語ったことが聞く人によってはつまずきや迷いのもとになってしまうことがあるということも知りました。私が聖書を読んで感動し、これを伝えたいと思ったことでも、それが本当に聖書の語ろうとしていることであるか、語る言葉が本当に相手に福音として伝わるものであるか、よく吟味しなければなりません。私にとっての、これからの大きな課題が与えられたように思います。

今回の夏期伝道実習で特に思い出深かったことは、8回にわたって御言葉を語らせていただいた家庭集会です。準備をすることは大変でしたが、それでも家庭集会で詩編の「都に上る歌」を読み、聖書研究の後で共に御言葉について集まってくださった方々と共に語り合い深め合う時間は非常に充実した時でした。読んでみると難しい所が多く、十分に語る事ができたとは思えませんが、多くの方がこの箇所に興味を持ってくださり、語り合っていくうちに御言葉の理解が深まっていったということは、とても貴重な経験でした。共にこの詩編を読むことができて良かったと思える家庭集会でした。

幼小科と中高科とで2回行ったCSキャンプも、とても思い出深いものでした。私はキャンプに慣れておらず、子供たちと交わることも決して得意とは言えませんでした。愛宕町教会のパワフルな子供たちのおかげで私も勢いに乗って楽しくキャンプの時を共にすることができました。子供たちがこれからも元気に育ち、教会の未来の担い手として神様によって信仰が養われていくようお祈りいたします。

一カ月の実習期間、私を励まし支えてくださった愛宕町教会の皆様、いつも丁寧にご指導くださった宍戸先生に感謝いたします。沢山の学びと、良い交わりの思い出と、私自身の沢山の課題を与えられて帰ることが出来ました。このような素晴らしい夏期伝道実習の時を与えてくださり、常に導いてくださった主に感謝いたします。愛宕町教会の伝道が主によって力づけられ、愛宕町教会において主の恵みが満ち溢れますように。

編集後記

- ▶原稿をお書きくださった宍戸先生はじめ皆様には感謝申し上げます。それぞれの書かれた事から多くを学ばされました。信仰をどのように表して生きるのか、考え、祈り、み言葉に聞いたら良いですね。毎週「あなたは生きてよいのだ」と、救いの信仰を聴き、幸いな教会生活が送れることを神様に感謝します。毎回、編集・レイアウト全てをお願いしているRF姉に御礼申し上げます。(KS)
- ▶一番最初に原稿を読み、繰り返し読み、恵まれております。総務部員の務めに感謝です。(RF)